

《資料紹介》

宮大工関係資料(大工道具類)について

湯川 洋史

1. はじめに

本稿は令和4年に寄贈を受けた宮大工関係資料の内、大工道具について紹介するものである。本資料群は大別すると、師匠筋の文書を含む古記録類と、実際に使用した大工道具類の2種に分けられる。その資料的性格から、当館では古記録類は歴史分野(文献史学)が、大工道具類は民俗分野が、それぞれ収蔵している。古記録類については、すでにその一部が公表・活用されている(注1)。

本資料は、2代にわたり宮大工を生業とした家の旧蔵資料である。初代は元々醤油屋をしていたが、明治維新後職業を変え、大工となった。この時、弟子入りしたのが水民元吉だったという。2代目は明治28年(1895)に生まれ、熊本県立工業学校(現・県立工業高等学校)に通い、大工となった。

大工道具類は、大工道具箱10箱にそれぞれ入っていたものと箱外に収納されていたものに分けられ、箱を含めた総件数は323件だった。大工道具箱のいくつかには側面に紙が貼られ、そこにアラビア数字の通し番号が付されている。それによると16番まで通し番号のあったことが知れるから、現状確認できる道具箱以外に少なくとも6点ほどあったものと思われる。箱には「昭和12年」、「昭和10年」作成とあるものもあるから、箱を新調し、処分した可能性も考えられる。

また、1代目と2代目の道具が混在している可能性、古記録同様に師匠筋の道具が混在している可能性もあり、これが明治28年生まれの2代目だけの道具なのか、そうではない

のか、判断を下し難い状況にある。

そのため、大田区で昭和18年におこなわれた標準編成第一形式との比較や、桃山天満宮の大工道具との比較など、先行事例との比較が難しく、かつ熊本の宮大工の大工道具の編成を考える上でも使用時期、使用者が特定できないという事情から、そういった方面での寄与はなかなか難しいと言わざるを得ない。そのような理由から、本稿はあくまでも市内宮大工の使用道具の一例を提供することにとどまるものであることを明言しておく。

2. 道具の構成

既出の通り、大工道具は10箱、箱以外の裸の状態の道具があった。全体では箱を除くと324点の道具があり、その内訳は、鉾1点、鋸類23点、鑿類75点、鉋類58点、槌類8点、錐類30点、儀礼用5点、墨掛57点、その他67点である。

点数上は標準編成第一形式より多いが、内訳を見ると偏りが見られる点に構成上の特徴がある。例えば斧や大型の鋸類(挽割鋸や穴挽鋸)、鼠歯錐が見られない。一方で、鉋類と鑿類が多く、特に裏丸鑿は30点ある。

ただ、上棟式に用いられたと思われる儀礼用道具に欠が見られることから、この構成上の偏りが、仕事上の特色によるものなのか、伝来の最中に失われた結果なのかは現時点では判然としない。すでに言及した道具箱の貼り紙通し番号を見るに、伝来の最中で失われたものがあつたと推定した方が現時点では妥当と思われる。

また、墨掛道具の点数が多いのは、墨指や墨といった消耗品が多く存在するからで、構成的な特徴を見ることはできない。

ほか、マイナスドライバーやニッパー、レンチ

などの工具も見られる。この辺りは新しい道具で、使い勝手の良いものを選びながら取り込んでいったことを示すものと思われるが、この点を明らかにする知識も情報も現在持ち合わせていないため、構成上そうしたものがあることを指摘するにとどめておく。

3. 各道具について

本章では各大工道具について述べる。道具は目録に法量、写真を付して掲載しているので、詳細についてはそちらを参照していただきたい。

(1) 大工道具箱

すべて木製で、被せ蓋とスライド式の蓋の 2 種がある。いくつかの蓋には製作年があり、大工自身が製作したことが知れる。紙が側面に貼られ、アラビア数字で番号が付されたものもあり、中には側面天・地に持ち上げやすいように棧(取手)が後補されたものも見られた。番号については仕事上、入れている道具が分かるように分類したものかと思われるが、その点判然としない。

(2) 鉦

直刃の鉦である。斧類がほかに見られなかったため、儀礼用かと思われたが、装飾はなく、柄が使用によって摩耗していることから実際に使用していたものと推定する。

(3) 鋸類

鋸の構成は挽切鋸 8 点、糸鋸 2 点、鴨居挽鋸 3 点、胴付鋸 1 点、引廻し鋸 5 点、鑢 3 点、両刃鋸 1 点である。先述したように大型鋸が見られない点に特徴がある。これらの鋸には木製の鋸の刃先を覆うカバーが付属していた。だが、中には明らかにサイズが合っていない

ものもあり、カバーに書かれた情報をそのまま信じることは難しい状況である。ただこの内 1 点に「木下音八」と墨書のあるものがある。この人物の詳しい来歴などは不明だが、歴史分野が収蔵した古記録類にも名前が見え、同門と思われるから、古記録だけでなく、道具に関しても何かしら受け継いだものがある可能性がある。目録には記せなかったが、1 代目の名前が彫られた鋸もあり、少なくとも 1 代と 2 代の道具が混在している可能性は高そうである。

また、鋸身に鍛冶師の名前が見えるものは全 20 点中 15 点ある。この内、製作年代も分かるのは挽切鋸と鑢各 1 点で、それぞれ「延寿信繁」が大正 7 年 10 月と同 10 年 10 月に製作したものである。延寿信繁作の鋸はほかに 9 点ある。先の 2 例と併せると 11 点で、その内訳は鑢 3 点、鴨居挽鋸 2 点、挽切鋸 6 点である。

延寿信繁(注2)について現状分かることは何もない。「東肥熊府住」や「熊本住」とあることから、熊本在住の鍛冶師だったということが推測できる程度である。「延寿」と言えば、菊池に住んだ刀鍛冶の一派が想定される。だが、庇護者の菊池氏衰退後は野鍛冶化したといわれる彼らの活動については研究も乏しいからはっきりしたことは言えない。(注3)ここでは延寿を名乗る野鍛冶によって製作された鋸を愛用していた程度にとどめておくべきだろう。

ほか鋸柄が作り直されたものや、鋸身を詰めたものか製作者の銘が柄部分に一部沈んでいるものも見られた。先に見た木製カバーの墨書と併せると、一部引き継いだ道具を補修しながら使用した可能性が考えられる。

(4) 鑿類

鑿類は突鑿 10 点、叩き鑿 21 点、蟻鑿 7 点、

裏丸鑿 30 点、鋤鑿 1 点、鐔鑿 2 点、向う区鑿 4 点という構成である。内、叩き鑿には本叩き、広鑿、中叩き、大入とあったが、判断のつかないものもあったため、すべて叩き鑿とした。また、突鑿の一部には薄鑿も含まれるものと思われたが、こちらも判断がつかないものがあったため、すべて突鑿とした。

すでに述べたように、裏丸鑿が 30 点を数えることは特徴的だが、聞いた限りでは数寄屋大工でもなかったというから、裏丸鑿が多い理由はよく分からない。

銘の見られるものもあったが、かなり摩耗しているものや錆が付着したものが多く、銘についてはほとんど確認できなかった。中には既製品もあるものと思われる。

(5) 鉋類

平鉋 10 点、決鉋 24 点、内丸鉋 3 点、外丸鉋 5 点、敷居・鴨居用鉋 2 点、反り台鉋 2 点、台直し鉋 2 点、面取鉋 3 点、脇取鉋 7 点という構成だった。

この内、決鉋については判然としなかったものもあったため、底決鉋と機械決鉋も含んで一括で決鉋として集計している。また、決鉋は西型、東型、大阪型、鑿型と分類されるようだが、本資料群ではそれぞれが確認でき、その分類で把握することの意義を見出すことができなかったため、特に目録などには掲載していない。

本資料群の鉋の特徴として、決鉋、敷居・鴨居用鉋、面取鉋、脇取鉋に既製品ではなく大工自身による製作のものが見られた点が挙げられる。そのため、刃にはヤスリや鑿、金属製定規を転用したのものが見られ、独特な造りとなっている。また、平鉋などの刃が動かないよう紙を台に貼り付けて、間を詰めている点も

特徴的といえそうである。

鉋身の多くは 2 枚刃で錆と摩耗のため、銘自体を確認できるものは僅少である。それらも既製品と思われるものが過半であり、鋸と異なり、鍛冶師について述べるのは難しい。

(6) 槌類

槌類は片口玄能 2 点、両口玄能 3 点、先切金槌 1 点、下腹金槌 2 点で構成されている。だが、玄能と金槌の使い分けについては不明なところもある。

(7) 錐類

丸錐 1 点、壺錐 8 点、三ツ目錐 6 点、四方錐 3 点、ハンドル錐関係 6 点、ポールト錐 6 点という構成である。全体数から考えると壺錐と三ツ目錐が多く、鼠歯錐は見られない。壺錐を除いたほとんどは既製品である。

(8) 儀礼用道具

儀礼用道具として、上棟祭関係の道具がある。だが、それもすべてが揃っているわけではなく、失われたものと思われる。

(9) 墨掛

曲尺や自由がね、スコヤといった定規類、罫引き、下げ振り、二丁白書、墨壺など一式が見られる。ただ箴定規や口引きなど見られない道具もある。

(10) その他

ドライバーや釘締、ヤスリ、砥石、肥後守などである。欄間や木組みの習作と思われるもの、下図などもあるほか、レンチやニッパーなどの工具類も見られる。

造営に関わったものか、「藤崎宮神殿小妻破

風形」とある型がある。ただ、これが 2 代時代のものか、1 代か、はたまた師匠筋のものかは判然としない。藤崎宮の墨書がミセケシされていて、かつ「不用」とあるから、失敗したものかと思われる。

4. おわりに

ここまで当館所蔵の宮大工道具に関して記した。個人情報から伝来した家の名前を明確に記すことができなかった点は残念である。そうした配慮のため、画像や備考から個人の家が特定できるような情報は除いている。

はじめに、で記したように本資料群は古記録と併せて寄贈されたものである。大工道具類に関しては、私の知識不足が原因で整理や分類に時間がかかり、古記録に比して、ここまで公表が遅くなった。また、一部分類については専門外の人間には容易に判断がつかないものがあつた。その点不完全なものを公表することには抵抗を覚えたが、識者の目に入り、ご叱正、ご指導を賜る方が有益と考え、無謀を承知で今回作成し、公表した。当館にはほかにも未整理の大工道具があることから、識者によるご指導を切に望むものである。

また、本稿には目録を付すつもりだったが、紙幅の関係上目録を掲載することが難しくなったため、紙ベースで読まれている方には申し訳ないが、当館 HP 上の館報掲載ページから目録付完全版をダウンロードしていただくと幸いである。

参考文献

公益財団法人 竹中大工道具館『常設展示図録』
2014
大田区立郷土博物館『大田の職人－その道具と造形』1985

福持昌之「桃山天満宮の奉納大工道具」『京都市文化財保護課研究紀要』2号 2019

(注1) 谷口征雅「現場レポート 熊本県 重要文化財阿蘇神社一の神殿ほか 5 棟「楼門の櫃割について①」」『文建協通信』No.151 公益財団法人文化財建造物保存技術協会ほか

(注2) 一部、信繁ではなく、繁信と彫られたものもあつた。

(注3) 『新熊本市史 通史編 近世Ⅱ』p.1060